

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720165
 研究課題名（和文） 中世禅宗寺院の経済組織に関する研究—禅籍史料の活用を通して—
 研究課題名（英文） Research on economic organization in Zen temple in Medieval Japan
 —Through the use of Zen books
 研究代表者
 氏名（アルファベット） 川本 慎自（KAWAMOTO SHINJI）
 所属機関・所属部局名・職名 東京大学・史料編纂所・助教
 研究者番号 30323661

研究成果の概要：

日本中世の経済に大きな影響を与えた禅宗寺院については、文書史料の残存の乏しさから、真言系寺院や南都寺院に比べれば必ずしもその経済組織の研究は進んでいるとは言いがたかった。本研究においては、文書以外の禅籍等を調査し、歴史学研究の史料として用いる方策を検討することを通して、禅宗寺院の経済組織を構成する「東班僧」の実態を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	240,000	2,740,000

研究分野： 日本中世史

科研費の分科・細目： 史学・日本史

キーワード： 日本中世史・禅宗史・史料学・東班僧

1. 研究開始当初の背景

禅宗寺院および禅僧の中世経済への寄与は、幕府財政・荘園経営・遣明船貿易など、多方面にわたっている。しかし、それを担った寺院内の経済組織については、「東班僧」と呼ばれる禅僧が高い経営能力を持っていたことは指摘されているものの、組織としてどのように構成されていたかについては明らかになっていないことは多くない。経済史的あるいは寺院史的な観点から、東寺や醍醐寺などの真言系寺院、東大寺をはじめとする南

都寺院などについては寺院組織の形態・機能・構成員についての詳細な研究が進んでいるが、真言系寺院や南都寺院と同等あるいはそれ以上に中世経済への関与がある禅宗寺院については、その経済組織の研究ははるかに及ばない研究状況となっているのである。

こうした研究状況の原因の一つに、東寺・醍醐寺や東大寺に比べて禅宗寺院に残された史料が圧倒的に少ないことが挙げられる。十数万点に及ぶ真言系寺院や南都寺院の文書に比べれば、禅宗寺院で最多の大徳寺文書

でも五千点に及ばず、その差は歴然としている。このため、禅宗寺院についての研究は、『蔭涼軒日録』をはじめとする禅僧の日記類のみに依拠することとなり、永享～文明という限られた時期の、相国寺という特定の寺院の様相をもって禅宗寺院全体を論じるという結果になっている。

しかし冒頭に述べたように、禅宗寺院が中世経済へ寄与したものはきわめて大きいのであり、禅宗寺院の経済組織の研究をすすめることは、室町期の政治史・経済史の観点からも、急務であるといえよう。

2. 研究の目的

本研究では、禅宗寺院の経済組織、具体的には「東班衆」とよばれる僧侶集団が、どのような組織を持ち、どのような禅僧から構成され、どのように寺院経済を支えていたのかという点を明らかにすることを目的とする。そして、そのための具体的方策として、禅宗寺院に関する書籍類、いわゆる禅籍を分析し活用することを試みる。南北朝期の「五山版」の出版活動以来、禅宗寺院には版本・写本を問わず書籍を創り出す営みが連綿と行われてきた。その中には儒学書・仏書など中国伝来のものを刊行したものもあるが、語録・詩文集・注釈書など、日本側で著述された書籍も多い。そうした和書としての禅籍には、日本の禅宗寺院の内部の様相を示すものが数多く含まれている。こうした史料を用いて、乏しい文書史料を補うことにより、禅宗寺院の寺院組織、特に経済組織を復元しようというのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の具体的な方法としては、文書史料のみならず禅籍類を活用することにより禅宗寺院の経済組織の復元を行うという方法を取った。

禅籍の中には、「清規」と呼ばれる禅宗寺院の規則集が多く含まれている。清規は文書史料にみえる規式とは異なり、冊子・卷子の形態を取る大部なものであり、儀式次第から日常生活に至るまで、寺院内のさまざまな規定が細かく定められている。そこには寺院組織に関する規定も含まれている。さらに、こうした禅籍をテキストとして禅宗寺院内では高僧による講義が行われており、その講義内容は受講者により筆録され「抄物」の形で

残されている。こうした「抄物」は講義内容がそのままカナ表記・口語体で筆録されており、従来は国語学の資料として注目されてきた。しかしその内容は単なる語義の注釈にとどまらず、寺院における様々な具体例が豊富に含まれており、こうした具体例の検討が歴史研究にも資するものであることは、拙稿「禅僧の荘園経営をめぐる知識形成と儒学学習」(『史学雑誌』112-1、2003年、59-75頁)において既に考察したところである。本研究においては、テキストとしての「清規」、注釈書としての「抄物」を併せて検討することにより、寺院組織の規定と実態の両側面に注目し、中世の禅宗寺院の経済組織の復元を図る。

ただし、こうした禅籍の研究は、禅学や書誌学の分野では行われているものの、歴史学の分野ではあまり広く行われているとはいえず、研究の蓄積も多いとはいえない。そこで、禅籍を歴史学の研究の史料として活用する基礎的な作業として、禅籍が成立する様相を復元する試み、具体的には禅籍が成立する場面における人的なネットワークを探る試みも併せて行わなければならない。そうした試みによって禅籍を歴史学の史料として史料批判することが可能となり、今後継続的に禅籍を史料として活用してゆくことが可能となってゆくであろう。

4. 研究成果

本研究の成果としては、まず第一に、全国各地の禅宗寺院および史料所蔵機関へ出張し、禅籍およびその関係史料の調査を行ったことが挙げられる。調査地域としては関東地方および中国地方が主となったが、場合によっては他の科研費による研究グループと共同で調査を行い、蔵書目録の作成およびマイクロフィルムによる写真撮影を行った。本研究は平成20年度で終了の予定であったが、平成20年度の後半になって新たな調査が可能であることが判明したため、所定の繰越手続を取って平成21年度にも継続して調査を行った。なお、目録については『東京大学史料編纂所報』や『東京大学史料編纂所研究成果報告』に随時掲載する形で公開し、マイクロフィルム撮影したものについては、原蔵者の許可を得て写真帳の形で史料編纂所図書室において閲覧公開を行っている。

さらに、こうした史料調査を踏まえて、禅籍を歴史学研究に活用する基礎的な作業として、禅籍が成立する背景となる人的ネットワークをさぐる研究を行った。具体的には禅

宗寺院における儒学学習活動に着目し、とくにその舞台となった足利学校と建長寺をはじめとする鎌倉五山寺院とがどのようにつながっていたかという点について、常陸佐竹氏を中心とする「常陸儒壇」とも呼ぶべき学問文化圏や、相模から伊豆にかけての了堂素安門下の「宝珠庵門派」とも呼ぶべき法系による人的・物的交流が形成されていたことを明らかにした。

また、本研究の主たる目的たる禅宗寺院の経済組織についても、禅宗寺院の経済組織を構成する「東班僧」の継続性についてに着目し、その嗣法関係の実態について考察するとともに、東班僧の財産の継承について明らかにした。こうした考察は、直接的には寺内における財の蓄積を解明する手段となるものであるが、それのみにとどまらず、経済活動を行うにあたって必要となる実務的な知識がどのように継承されてゆくかという問題についても鍵となるものと考えられる。

なお、副次的な成果ではあるが、禅籍史料をどのように著録し、どのように所在状況を把握し、どのように研究資源化していくかということについて、その手段の一つである禅宗史に関するデータベースの現状と課題について考察を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

川本慎自「日本禅宗史に関するデータベース」『日本歴史』740, 2010, p. 124-126, 査読無

川本慎自「足利学校と伊豆の禅宗寺院」『アジア遊学』122, 2009, p. 163-170, 査読無

川本慎自「室町期における東班衆禅僧の嗣法と継承」『中世の寺院と都市・権力』山川出版社, 2007, p. 323-342, 査読無

川本慎自「中世後期関東における儒学学習と禅宗」『禅学研究』85, 2007, p. 139-163, 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川本 慎自 (KAWAMOTO SHINJI)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号: 30323661

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

